



## 「クリティカル」であること

赤松 「クリティカル・デザイン」という言葉がありますよね。この「クリティカル～」みたいな言葉に不思議な感覚をもって、パッと思いついたのが「クリティカル・サイクリング」でした。考えはじめると、この言葉に触発される観点が自分の活動に多かったことに気づいて、これを深めようと、2016年4月の教員ミーティングで発表したところ、思いのほか興味を持ってもらえたり、反応の良い学生が多かったんです。

松井 僕が面白いと思った点は、サイクリングをしてない人、つまり僕自身のことなんですが、そういう人にとっても、自分の問題として考えられる部分があることです。思考実験として共有できるプラットフォームであるところを、「クリティカル」と捉えました。IAMASでしか準備し得ない「クリティカル」なポジションを見出すことに意義を感じたわけですね。正直、こんなにコミットするとは思っていなかった(笑)。赤松さんのお話をまとめるように宣言を準備し、僕自身の観点が混ざっていたわけですが、勢いって恐ろしいものだなとか、いま読み返しても良く書けてますよね(笑)。もちろん思考実験で書いたわけで、自転車に乗らなければ書けない部分があるに違いない。案の定、伊村さんから「乗

ってない人が宣言を書くのか!」と批判されましたね(笑)。僕は未だママチャリ派なわけですから、まあ反論できないわけで、罪滅ぼしのようにコラムでママチャリ宣言を寄稿したわけです。

伊村 2016年の新学期から大垣に引っ越してきて、赤松さんに誘われてすぐに自転車に乗ることになったわけですが、その理由は松井さんと逆で、乗ることで「クリティカル」な取り組みをしてみたかったわけです。美術の研究をしている自分が、どう「クリティカル」たり得るかを意識的に振り返ってみたいと思ったんです。自分の規定を外すタイミングにきているのかなと、敢えて異質に見える自転車と美術史を結びつけて発言してみたいということが、赤松さんの取り組みに関わった動機にあるのだと思っています。それで松井さんへの批判ですが(笑)、それは単純な理由で、私が自転車に乗って先ず楽しかったからなんです。乗った瞬間から面白かった。それが「乗ってもいないのに!」に繋がる。乗った瞬間に見える景色が、過去の美術作品や、メディア・アート作品に接する感動に繋がるところがあるわけで、単にフィジカルに止まらない、それ以上の経験だと思います。

松井 芸術に関わる観点でいうと、八嶋さんの作品は自転車と関係ありますか？

八嶋 作品を撮影するためのロケ班で自転車に乗るところはありますね。場所を探すというのでもなくて、赤松さんの後ろについて知らない場所に行くのが良いなと思っているんです。

伊村 そういう楽しみ方あるかなと思うんですよね。走ることに集中できるし、地図情報だけではなくて、体験して情報を知っていくことが面白い。

松井 北村さんは、「クリティカル・サイクリング」以前のライドから参加されているんですよね？

北村 IAMASに転勤してすぐでしたから、2年くらい前。クリティカル・サイクリングという宣言はまだなか

ったですから、「BC1年」でした。最初は、一緒に乗れる人がいるなあと思ったわけです。

自転車に乗ることが「バランス」になる

松井 瀬川さんが、宣言を読んだ際に「バランスの復権」というセンテンスが気に入ったと言ってくれたことがありました。

北村 私も「クリティカル・サイクリング宣言」がなんなのか？ 全体をつかめていないんですが、宣言文の「バランス」というところはすんなりとわかった気がしましたね。

赤松 自転車って、「バランス」をうまくとるのではなく、結果的に「バランス」がうまくとれてしまうものなんですね。自転車に乗ることが「バランス」になってきたりする。ひょっとしたら、「バランス」が取れることが、自転車そのものの大きな特性かもしれませんね。

伊村 「バランスの復権」って何に対する復権なんでしょうね？ この辺りは乗ったときのことだけでは無いですよね。宣言の中で「バランス」はいろいろな意味を含んで書かれている。

八嶋 「バランス」に関連して僕は、「共に世界を再起動しよう」に納得したんです。それは、自転車で美しい景色が見られて楽しいわけですが、存在論的に新しい風景が待っていたみたいと思うんです。風景がそこに待っていて、そこに入れたという感覚。その場所の歴史を感じたりする。自転車でイメージを作っていく感じというか、自転車に乗らなかったらあり得ない考え方が見出されるリフレッシュを「再起動」と思いました。

松井 みなさんの指摘から宣言を起草した際に、「バランス」や「共に世界を再起動しよう」というあたりを書く際にイメージとしてあったのは、赤松さんが、風の中で走っていると、自転車の速度との関係で、まったく無抵抗な感じを得ることができるというエピソードでした。静止して動いている感じなんではないかな？

赤松 風に乗るといえるか、風と一緒に走るといえるか。地球を背負っているみたいな、地球と一緒に動いているような感じだね。それがすごく気持ち良い。自分を取り巻く環境と、自分が一緒に動いている。多分、ママチャリでもそれを味わうことはできますよ（笑）。

松井 僕は自転車の世界でどんなことが一般的に論じられているのか詳しくないんですが、レースとして競ったり、アスリートとして精神論なんかを想像していて、それにアンチな観点で共感したわけなんですね。レースやアスリートありきだと、テクノロジーにしても単純なモダニズムに回収されてしまう。それに対してもっと個別的な感じで「バランス」や気持ち良さを考えられるのは面白いですよ。

赤松 テクノロジーって万能につながるけど、自転車で考えると引き戻されるところがありますよね。テクノロジーは戦争に結びつくけど、自転車は役立たずだから（笑）、効率化された現代の戦争には使われない方向にあると思っています。

松井 自転車の最適化って、世の中のそれより個別のものって感じでそれが面白いですね。単純に言えば、みんなハンドルやサドルの高さ違うじゃないですか。いういじれる部分の繊細さもある意味でバランスをはかるポイントですね。いま一度言い訳しておきますが、僕の理解も偏っているのでも「宣言」に関しては、提案があればどんどん出してくださいね。githubにありますから。

赤松 いままで内輪だったのですが、今回の紀要でどういう反応が出てくるか楽しみです。プルリクお願いします。

## 大垣でのファースト・ライド

松井 IAMASに入学して自転車に乗るようになった学生に話をきいていきましょう。

湯澤 赤松さんに入学から一週間でライドに誘われました。「いまの時期、風景が綺麗だし」というような感じで揖斐へ行きました。この辺りは、自転車にとっての環境がとても整っている気がしています。もともと自転車にはよく乗っていて、バックパッカーしていたこともあります。それでIAMASに入学することになって、勉強に集中しようと自転車を友人に譲って大垣に来たんです。そういう事情もあって、いまは赤松さんの自転車を借りて参加しています。とことん学んで、作ろうという意気込みだったわけですが、ライドに参加して、良いものを食べて、良い景色をみて、バランスが取れています。

綿貫 中高生のときは、自転車はやだなあと思っていました。自転車で40分くらいかけて通学していました。あとは釣りにハマっていて、5キロくらい先に友人と行くときに乗ってましたね。ずっと電車やバス通学に慣れていました。でもIAMASに来て、毎回のライドで見たことのない景色がすごく面白くて、そこから自転車に関心が出た感じです。いまは東京に戻ったときも、電車に乗らないようになりました。小さなスケボーで、街をスキ

ちゃんするみたいにして、渋谷から秋葉原までの10キロをスケボーで移動すると、いままで気がつかなかった雑貨屋や神社が発見できるんです。冒険に近いものがあるって、電車だとたったの5分とか10分が冒険になって、全然違う景色が現れてきます。

後藤 もともと運動が苦手なんですけど、皆さんを見ていてすごい楽しそうだし、宣言文を読んだときに、これは乗らないと理解できないと思って参加し始めました。いきなりずいぶん乗りましたが、呼吸が楽だったんです。リズムカルに呼吸ができました。

最初、「クリティカル・サイクリング宣言」の起草に入らなかったのは理解できていないからでしたが、けどいまならなんとなく感じ取ることができます。頭だけでなく身体で、別のフェーズから考えることができるようになってきました。

松井 綿貫くんが電車の移動を止めて、スケボーや自転車で都市の見え方が変わってきたという体験は、『魔女の宅急便』のレビューにも反映されているよね。僕は自転車からこの映画を意識したことなかった。

綿貫 意識的にジブリ作品を見直してみました。それをまとめようと思ったんですけど……。

伊村 言われてみるとジブリ映画は、確かに風を感じさせるシーンが多いですね。

松井 湯澤くんは、もともと長距離で乗ったりしてきたというのは、どういう背景があったんですか？

湯澤 もともと旅が好きで、バックパッカーで東南アジアを回っていたんですが、日本国内をあまり知らないなと気づいて、途中で人と交流できるからと最初はヒッチハイクを考えました。でも運転手の方としか交流できない。そういう意味で、車は人と接することはゼロで、徒歩の場合は話しかけられないんです。でも自転車だと声をかけられやすいことを発見しました。「うちの息子みたい！」とか声をかけられるんです。沖縄を巡ったときはフェリーで知り合ったおじいちゃんの家泊ったり、車じゃないなと。他にも干し柿をもらったり。きっと人は、自転車に興味があるんですね。

松井 コミュニケーションツールとしての自転車ということですね。やはりそういうコミュニティとかもあるのかな？

赤松 湯澤くんはそういうの得意だね。性格でしょう(笑)。

自転車のコミュニティということでは、彦根に江戸時代の自転車見に行ったとき、駅でレンタルサイクル借りたら、そこのおじさんが一日中案内してくれました。それはNPO的な活動であって、ヨーロッパではウォームシャワー(Warm Showers)といって、インターネットを活用して、自転車の旅行者の宿泊の支援や情報供給が図られてますね。

### ライドの楽しみを発見していく

綿貫 赤松さんが最初に自転車をはじめたのはどういうタイミングですか？

赤松 みんなが思っているほど熱心ではなくて、僕以外に自転車好きな人がIAMASには多くいた。最初は、軽くいいなと思った程度で、熱中はしなかった。きっかけは東日本大震災で、計画停電が起これと言われた際に、大垣だと避暑地にでも行かないと暑いだろうと思って、せっかく避暑地に行くのならとロードバイクを買ったのが最初。ちょうど卒業生が自転車で使うアプリを作っていたので試したかったのもありました。最初に乗ったときは9kmくらいでアップアップだったんで、伊村さんはなんでいきなりこんなに走れるのだろうと思った。

伊村 わりと男女の差が出ないところがあるんじゃないでしょうか？

赤松 体重が軽い方が有利なところがあるからかも知れない。

松井 話し変わりますが、伊村さんが、みんなで走るときに、先導が面白いと言っていましたね。

伊村 大体いつも赤松さんが先導で、ツール・ド・西美濃のときは八嶋さんが先導をされていてんですね。サインが人それぞれ違うのが面白かったですね。

松井 みんなでライドのときってなにかコミュニケーションがあるんですか？ 共通言語としてのサインということ？

赤松 手旗信号みたいなもので、止まるよ、とか、地面になにかあるよとか伝達するわけです。個性は出ますね。

八嶋 いつも前は赤松さんで、僕が前だったときはしんどかったんです。コースも考えないといけないし。

赤松 気を使うよね。先頭にいと道を覚えなくては行けないし、今度、それぞれが先導を試みるのもいいと思う。

松井 ライドのときの並びって、順番があるんですか？

赤松 初心者は真ん中。最初と最後はわかっている人で固めますね。

松井 抜いたり抜かれたりとかもあるんですか？ 赤松さんと八嶋さんとかで（笑）。

赤松 競争ではないからあまりないけどやるときはやりますね。

八嶋 赤松さんはどんどん速くなってますよね？

赤松 機材が良くなると明らかに速くなる。空気抵抗少ないやつですね。精神論や体力もあるけど、機材勝負。若い人はお金をかけられないから体力で頑張る。年配になってくるとお金で良い機材で補完する。それでちょうどバランスが取れている気もするんです。いろいろなたちの競争があるね。

松井 赤松さんは何台か自転車を所有していますが、コースによって自転車を変えたりするんですか？



赤松 明らかにロング・ライドに適しているのは、リカンベント。一人のときもそうですね。このタイプは低速が難しいので、みんなで走るときはそれこそバランスが悪くなる。みんなで走るときはロードバイク。ロードバイクは先頭で風を切れるので、続く人が楽になるんです。そのあと順番を変えて、助け合い集団走行ができる。風は助けてくれる一方で、戦う相手でもありますね。

松井 北村さんはずっと参加してきてどうですか？

北村 時間外なんで、趣味ですね（笑）。最初に乗って思ったのは、単純に自分が知っていた自転車よりも快樂だということですね。車ほど手に負えないわけでもなくて。歩きだと行けないけれど、車だと途中の風景を飛ばしてしまうとか脳の処理が追いつかない。自転車だとちょうど脳が捉えられるスピードで移動できて世界が広がる感じがします。コラムにも書きましたが、「天候にも左右される中途半端な乗り物」であるところが、ちょうどいい道具なのではないかと思いますね。

とにかく自転車に乗っていこう！

松井 「クリティカル・サイクリング」という言葉を赤松さんが投げたわけですが、こうして様々な反応が得られたわけで、僕もたいへん楽しく関わってきました。トークイベントの際に、平林真実さんが最後まで聞いてくださって、車だってそういう側面があるということを言われたと記憶しています。僕にとっては、最初に述べたように、「クリティカル」という観点を得るというところだけで考えると、まさにその通りなんですよ。だから、僕は平林さんが「クリティカル・ドライブ」とか主

張されたら、それにもぜひ関わりたいわけですね。そこで際立ってくる差分がやはり面白いんですね。車は無くなってみんな自転車になれば良いという話しじゃ無いし、その逆でもない。

伊村 自転車だけにフォーカスしてもいけないということですね。サイクル・トレインもあるし、そういう楽の仕方もあります。いろいろアレンジした遊びの余地もある。いろんなアプローチの仕方がある。車体が軽いとか、機動性だとか、身体の一部と言い過ぎかも知れないですが、そういうところに「クリティカル」な感動がありますね。

松井 自分の身体をもって世界との距離が測れるというか、誰でも参加できて、話題にできるところが大事ですね。今後も、教員から学生、事務職員、さらには外部まで、緩やかな場を保つことが大事なのだと思います。引き続き、赤松さんにライドを適当に呼びかけてもらっていただければと思います。

赤松 約1年、皆さんと一緒にできて、ここまでの賛同をもらえるとは思ってなかったです。改めて感謝しています。新年度は、違う側面から自転車を捉え直して、まだまだやられていないことを探して、謙虚に、新しい風を起こしていきたいと考えています。こうして紀要で特集して載ってしまったわけですが、これまで以上に気負わず、愉快で楽しく、ここで紹介した事柄にとどまらない拡がりを深めていきたいと考えています。

（2017年1月26日、IAMASにて収録）